島嶼県沖縄の強みを活かした「災害看護」科目の展開

佐久川政吉（科目責任者）

科目の新設の経緯と実際

平成 21（2009）年以降、看護師養成カリキュラムに「災害看護」が明示された。本学では、クリティカルケア関連科目で、災害看護は２コマ前後であったが、令和４（2022）年度から１年次対象（必修）の新設科目として「災害看護」を展開している。授業概要は「自然災害、人為的災害等、災害時の健康危機について学び、災害発生に備えた看護方法について学修する」である。

「災害看護」について、他の看護系大学と比較した本学の特徴は３点である。１点目は他大学では３・４年次開講で演習・実習も組まれているが、本学は１年次で、講義（１単位）のみであること。２点目として、災害看護を専門とする教員がいないため、災害に関連するエキスパートの非常勤講師で構成されていること。３点目は到達目標として「島嶼県沖縄における災害の特徴」を入れていることである。その授業内容として、足元から学ぶ沖縄の災害看護では、沖縄の戦後の歴史･文化から保存食のローリングストック（常に一定の食品を備蓄しておくこと）の知恵、台風被害を避けたコンクリート住宅等、他府県にはない強みとして講義している。また、小離島での住民・行政職・専門職等の島ぐるみの防災ケア体制がある。もちろん、災害看護の基本（種類・定義、災害サイクル等）についての概要は伝え、その後、実践者による DMA T（災害派遣医療チーム）、被災者・援助者の精神的健康とケア、災害時のボランティアについて展開している。さらに、学生のキャリア形成を意図し、グローカルな視点から、災害看護学の将来展望として、国際緊急援助、災害看護専門看護師、災害看護学の高等教育、国内外の災害看護学会等を組み込んでいる。

災害（看護）は身近な自分ごととしては捉えにくく、リアリティを持ちにくいため工夫していることがある。そのため、非常勤講師にはメディア（写真・動画）の積極的な活用を依頼している。さらに、災害発生時の支援や意思決定等の場面をリアルに体験するシミュレーションゲームを取り入れている。

学生評価として、２年目（令和５年度）の１年次（25 名）から抜粋する。①問い「私は授業から刺激を受けた」では、「非常に当てはまる」21 名（84%）、「かなり当てはまる」4 名（16%）であった。他の項目を含め肯定的な評価である。自由記載では「多くの講師の内容が聞け、とても面白い授業であった。災害時の医療現場での経験談はこれから災害現場に出た際には活かせると思った」等があった。

新カリ完成（2025）年度に向けて

本学の災害看護は演習・実習がないため実践が伴い難い。一方で災害は、全世代が対象となり、発災の超急性期から復興期までの災害サイクルによる各期のニーズ・支援の変化等が起きる。日常の段階から、横断的に多様な分野との協働が必須である。学生を巻き込んで本学が出来る防災の備えとして、本学体育館が那覇市指定避難所になっていること、近隣の各種機関（赤十字病院、市保健所、小中学校、まちづくり協議会等）が近くにあることを強みとして捉え、発災期からの避難訓練、避難所の支援等を含めた防災フェア等が必要と考える。